

## 静穏なる水面 蛇の蠢く闇 T.J.クラーク『死の光景』を読む

A Calm Mirror of the Water and the Dark Realm of the Serpent:  
A Reading of T.J. Clark's *The Sight of Death*

稲賀繁美

Shigemasa Inaga

### 1 閑雅と革命

北米合衆国西海岸の富の象徴といつてよいポールゲッティセンターは、一九七四年に開館した。有数の石油タイクーンにして、一九五二年には米国籍を離脱した大富豪の所有する超一等地の丘に位置した高台からは、ロスアンゼルス市内が一望に見下ろされ、その遙か先には、カリフォルニアの太平洋の波が明るく輝く。ロス滞在では、「絶対に見逃せない」観光名所。そこには美術研究者のための設備も整えられ、著者T.J.クラークはこの研究機関に、二〇〇〇年初旬から半年の、同業者の端くれとしては羨望を禁じ

えぬ、贅沢な滞在の機会を得る。美術館には、三年前に購入されたニコラ・プッサンの《静穏な風景》(Landscape with a Calm。以下、《静穏》と略す)がやすらつており、その反対側には、たまたまロンドンのナショナルギャラリーから貸し出されていた《蛇に殺された男のいる風景》(Landscape with a Man Killed by a Snake。以下、《蛇》と略す)が掛かっていた。別にそれらを眼にすることを期待していた風情でもない著者は、それらを眼にして気づいたことを、日記体で綴つてゆく。日記の記載は西暦二〇〇〇年十月二〇日に始まり、四月二四日まで続いたあたりで小休止し、そのあとは、離任後の翌年の三月に重要な加筆がなされるほか、断続的に記載が加わりつつ、二〇〇三年二月一四日にロンドンで、

仮展示室に逼塞している《蛇》に別れを告げるところで、終わる<sup>1)</sup>。

このためた二枚の絵画作品のために、約二五〇頁の紙幅が費やされる。日記体でまとまりもない感想や発見を書き連ねただけの本？それが市販の書籍として、エール大学出版局という、定評ある老舗から出版される。くわえてその挿絵は原則としてすべて原色であり、絵画の細部拡大写真が、惜しげもなく展開される。巻末に二〇頁ほどの註はあるが、通常の学術書の体裁はとっていない。加えて索引完備(？これについては後の註二八を参照)。あたかも、名声を得た特権的な学者にのみ許された、閑雅にして贅沢このうえないブルジョワ趣味の権化？そもそもプッサンなど、クラークが相手にするなどとは到底考えられない、「反動的」(p.iii)。以下、同書頁数で「権威主義的」な主題ではないか。一瞬、そんな当惑に囚われる向きもあるだろう。

そう、いまからはや四〇年近くまえに、プリストル生まれのイギリス人青年クラークは、二〇代半ばでバリ・六八年の革命騒ぎに立会い(日本では「五月革命」と称し、これが世界に

飛び火して大学紛争となった)、そのなかで、一八四八年の二月革命を背景として、『民衆のイメージ』絶対的ブルジョワ」といった革命的な著作を準備していた<sup>2)</sup>。弱冠三〇歳の七三年にこれらの著作が世に問われるや、それは熾烈な論争を巻き起こした。教条的なマルクス主義の機械的な適用は避け、むしろ写実主義の画家ギュスターヴクールベや、戯画批評家オノレ・ドーミエの時代このかた、百年以上にわたって検証されることもなく忘れられていたに等しい。一次史料を、執念にも似た探索によつて発掘し、それを根拠に芸術を社会環境のなかに位置づけなおす。その精緻にして果敢な方法論の実践は、もっぱら政治を敬遠して造形的価値の究明に専念していた当時の高踏的・講壇的な美術史研究の世界に対する、意識的な侵犯行為とも見える振る舞いだった。有閑階級の子弟の暇潰しといった風情も残っていた美術史研究の世界は、一方で構造主義革命の洗礼に晒されるときも、他方ではクラークに代表される社会史的な掘り下げによつて、それまでの暗黙の行動規範に問い直しを迫られることとなったからだ。